ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

第70号

2022.11.30

沖縄平和賞の賞状と賞牌

もくじ

「第 11 回沖縄平和賞」を受賞しました 1

資料館トピックス 2

2022 年度慰霊祭挙行 /「説明員トーク　米軍統治下のひめゆり」開催 / 糸満市教育委員会の教員研修を実施 / 糸満市平和ガイド育成事業に協力 /「ひめゆり証言映像上映会」を開催 / 教員・旅行会社対象オンラインセミナー開催 / 今帰仁村、読谷村で移動展開催 / 映像ワークショップ開催 /「第 5 回 " ひめゆり " を伝える映像コンテスト」作品募集中 / 学校団体用ワークシートを作成

コラム　相思樹 6

博物館実習生レポート紹介 7

本棚（仲程昌徳） 8

仲宗根政善日記抄（65） 9

ひめゆり平和祈念資料館　ご利用案内 11

新型コロナウイルス感染症予防対策を行っています

マスク着用・手指消毒・検温に
ご協力ください

「第 11 回沖縄平和賞」を受賞しました

このたび、当館は、第 11 回沖縄平和賞を受賞しました。

復帰 50 年の節目にアジア太平洋地域の平和構築への貢献という意義のある賞を受賞し、たいへん光栄に思います。また、何より、資料館を設立し、長年運営し、戦争体験を伝えてきた証言員（元ひめゆり学徒）の活動が評価されたことが一番の喜びでした。受賞の報告を聞いて、証言員のみなさんもとても喜んでおります。あらためて、これまで当館を支えてくださったみな様に心から感謝を申し上げます。

今年の２月ロシアがウクライナに侵攻し、現在でも激しい戦いが続いています。東アジアでも台湾有事をめぐる危機が高まっています。このような国際情勢の中で、日本の軍備の増強を主張する声もあります。

当館の設立理念には「私達は、私達の戦争体験を語り継ぎ、戦争の実相を訴えることで、再び戦争をあらしめないよう、全力を尽くしたいと思います」とあります。

このような情勢だからこそ、私たちは資料館の設立理念を再認識し、武力ではなく話し合いや外交によって解決していくことの大切さを訴え続けてまいりたいと思います。

ひめゆり平和祈念資料館 館長　普天間朝佳

◆「第 11 回沖縄平和賞」授賞式

第 11 回沖縄平和賞授賞式が 10 月 28 日、沖縄ハーバービューホテルで開かれ、ひめゆり平和祈念資料館に賞状と賞牌（しょうはい）、副賞の１千万円が贈られました。

沖縄平和賞委員会の会長を務める玉城デニー知事は「引き続きアジア太平洋地域の平和の創造に貢献し、賞金を活用した取り組みを通して平和を希求する県民の思いを世界に発信してほしい」と期待を寄せました。

濱田純一選考委員長は、「沖縄平和賞選考委員会は、ひめゆり学徒を始め沖縄戦を体験した全ての学徒のこれまでの活動に深く敬意を表し」、「激動が続く世界情勢の中で、本土復帰 50 年の節目の年の顕彰に最もふさわしいものと評価」したと選考理由を報告しました。

受賞者を代表して当財団の仲程昌徳理事長が「沖縄平和賞受賞は、証言員として頑張ってこられた学徒たちの活動を抜きにしてはありえないことでした。世の中が一段ときな臭くなっていくなか、資料館の活動はいよいよ大切なものになっていくに違いありません。資料館の職員は学徒たちの思いを引き継ぎ、開館以来の理念を守り頑張っていきます」と挨拶しました。

授賞式に続いて行われた受賞者記念講演では、普天間朝佳館長が元ひめゆり学徒による資料館活動と次世代継承の取り組みを報告しました。国際情勢が緊迫している今だからこそ、資料館の設立理念に込められた元ひめゆり学徒の思いを再認識し、武力ではなく話し合いや外交によって解決していくことの大切さを訴え続けたいと決意を語りました。

左からミス沖縄、濱田選考委員長、玉城知事、仲程理事長、普天間館長、ミス沖縄

■沖縄平和賞とは

広く世界に目を向けた幅広い視点に立って国際平和の創造に貢献するため 2002 年に創設され、表彰は 2 年に 1 度行われています。「沖縄の持つ特性を生かして、沖縄の視点から新たな国際平和の創造を目指し、沖縄と地理的・歴史的に関わりの深いアジア太平洋地域の平和の構築・維持に貢献した個人・団体を顕彰する」賞（沖縄県ホームページより）です。

■贈賞理由

沖縄平和賞委員会の贈賞理由では、「沖縄における普遍的な平和思想の象徴的な存在として、戦争の悲惨さや命の尊さを伝えてきたこと」「平和への想いを未来につないでいく活動を通して、アジア・太平洋地域ひいては全世界へ沖縄を平和の発信拠点として浸透させてきた地道な取り組みを行ってきたこと」があげられました。

また、元ひめゆり学徒が戦争体験を伝え、平和学習の場として長年平和教育に大きな貢献を果たしてきた実績や、後継者の育成、英語対応の充実による海外発信の活動についてなど当館の具体的な取り組みも評価され、今後の国際平和の推進への貢献と更なる発展への期待も込められたものとなっています。

授賞式に出席した当財団の役員と資料館職員

高校生による平和のメッセージ朗読

資料館トピックス

◆ 2022 年度慰霊祭挙行

6 月 23 日、「2022 年度ひめゆりの塔慰霊祭」が挙行されました。県内の新型コロナウイルス感染者が増えつつあったため、今年も参列者の人数を絞っての開催となりました。ひめゆり平和祈念財団理事や証言員（元ひめゆり学徒）など約 25 人が参列しました。

慰霊祭への参列をひかえていただいたご遺族も、お子さんやお孫さんと共に終日参拝に訪れていました。

慰霊祭で歌う元ひめゆり学徒

◆「説明員トーク　米軍統治下のひめゆり」開催

7 月 9 日、多目的ホールで、「復帰」50 年記念企画として「説明員トーク　米軍統治下のひめゆり」を開催しました。県内外から 25 人の参加者がありました。

説明員の仲田晃子が講師役となり、沖縄戦直後から 1950 年代初頭の短い期間に焦点を当て、「ひめゆり」をめぐるエピソードを取り上げながら、米軍占領が人々の暮らしや活動にどのように影響していたのかを解説しました。今回取り上げたのは、ひめゆりの生徒たちの直接の体験ではなく、「ひめゆり」に深くかかわる場所や事柄で、真和志村民による米須周辺の遺骨収集、元師範学校男子部生徒による友達の遺骨収集、ひめゆりの塔の建立、慰霊祭の実施、女師・一高女学校跡地の占領、戦争体験記録の出版といったものです。現在では当たり前のように行われている遺骨収集や慰霊祭などが、終戦直後は米軍との緊張関係のなかで行われ、頓挫することもあったことを紹介しました。

親子で参加した高校生から 80 代まで、幅広い年代の方が参加され、熱心に聴講されました。参加者からは、続きが楽しみです、自分でも参加できる勉強の機会があって良かった、といった声が寄せられました。

イベントのチラシ

◆糸満市教育委員会の教員研修を実施

8 月 2 日、糸満市教育委員会の初任者研修・中堅教員等資質向上研修の一環として講習会を実施し、27 人が参加しました。学芸課長の古賀徳子による「絵で見るひめゆりの証言」のワークショップや、映像視聴、新しいワークシートを用いた展示見学など充実した内容となりました。「展示をどう伝えるか」をテーマにしたグループワークでは熱心な議論が行われました。初任研と中堅研の合同研修の受け入れは初めてでしたが、初任者が中堅教員から刺激を受けるなど、より深い学びの場となったようです。

参加者には、学んだことを児童生徒に紹介するという課題が出され、夏休み明けに担当の学級などでさまざまに工夫をこらした「ひめゆりの紹介」がなされました。

グループワークの様子

◆糸満市平和ガイド育成事業に協力

8 月 13 日、糸満市平和ガイド育成事業の研修の受け入れを行いました。参加者は糸満市内の中学生 12 人と講習経験者の高校生「補助者」5 人の計 17 人です。補助者によるひめゆりの塔のガイド実践のあと、ひめゆり学徒隊とひめゆり資料館の概要を学芸員の前泊克美が解説し、展示見学、感想交流を行いました。初めて受講する生徒たちは、展示をひとつひとつ真剣に見学していました。見学後、受講生から

は「亡くなった方の写真に性格が書いてあって印象に残った」「同じ年代の子がたくさん死んでいることに驚いた」「この戦争のことを知って伝えないといけない」という感想が聞かれました。

資料館の概要を聞く受講生

◆「ひめゆり証言映像上映会」を開催

8 月 14 日、多目的ホールで「ひめゆり証言映像上映会―NHK が記録した 1989 年前後のひめゆり」を開催しました。

元ひめゆり学徒が資料館の展示づくりに奔走していた 1989 年前後、NHK 沖縄放送局は彼女たちの活動を長期にわたって取材し、1991 年にこの映像を当館に寄贈しました。このとき初めてテレビカメラの前で戦争体験を語った元ひめゆり学徒もいます。上映会では、学芸課長の古賀徳子が解説しながら、6 名の元ひめゆり学徒の証言映像を紹介しました。米軍の銃撃で重傷を負った生徒、その隣で学友の死を目の当たりにした生徒、またその近くで捕虜になることを恐れて自決をはかった生徒など、同じ場所にいた複数の生徒の証言をたどることで、沖縄戦末期の荒崎海岸の緊迫した状況を描く試みでした。沖縄戦に詳しい参加者には好評でしたが、ある程度知識がないと難しいとの感想も出ました。こうした意見を参考に、今後もさまざまな切り口で映像を紹介する予定です。

解説しながら映像を紹介

◆教員・旅行会社対象オンラインセミナー開催

9 月 10 日に、教員・旅行会社対象のオンラインセミナー「ひめゆり平和祈念資料館を使った平和学習」を開催し、21 人が参加しました。当館で開発した平和学習プログラムを教員や旅行会社の皆さんに紹介するために企画したものです。

前半は、オンライン平和学習の提案として、学芸課長の古賀徳子による「オンライン展示ガイドツアー（有料プログラム）」を実施しました。後半では、学芸員の前泊克美が当館で新しく制作したワークシートのパイロット版 2 種類を、今回のセミナーで初めてご紹介しました。ワークシートは今後学校団体に試験的に提供しながら改良していく予定です。ワークシートの詳細は６ページをご覧ください。

教員・旅行会社を対象としたオンラインセミナーを今回初めて開催しました。平和学習での当館の活用を紹介する機会として、今後も継続したいと考えています。

◆今帰仁村、読谷村で移動展開催

10 月 21 日から 11 月 20 日まで今帰仁村歴史文化センターにて移動展「ひめゆりと今帰仁」（ひめゆり平和研究所主催）を開催しました。2009 年に県外巡回展を行いましたが、県内での移動展は初めてです。今帰仁村が最初の開催地となったのは、当館の初代館長で、元ひめゆり学徒隊引率教師の仲宗根政善が今帰仁村出身であることが理由のひとつです。今回の展示会では、ひめゆり学徒隊の今帰仁村出身者 16 人についても紹介しました。

11 月 26 日からは読谷村のユンタンザミュージアムにて移動展「ひめゆりとハワイ」を開催中です。読谷村もまたひめゆりと関わりがあり、ひめゆりの塔の敷地の購入資金をひめゆり同窓会に寄付したのは読谷村出身ハワイ二世のハリー・儀間真一氏でした。今帰仁村同様、読谷村出身のひめゆり学徒隊についても紹介しています。開催期間は 2023 年 1 月 9 日までです。多くの皆さまのご来場をお待ちしております。

なお、ユンタンザミュージアムの開館時間は、午前 9 時～午後 6 時（午後 5 時 30 分入館締切）、水曜および年末年始（12 月 28 日から翌年 1 月 4 日）は休館です。

今帰仁村での展示会

◆映像ワークショップ開催

10 月 8 日、映像プロデューサーの山城竹識さんを講師に、ひめゆり平和研究所主催「映像ワークショップ」を開催しました。ひめゆりや沖縄戦を伝える最長 60 秒の動画制作が目標です。対面 4 人とオンライン 6 人の計 10 人が参加しました。

山城さんが手がけたミュージックビデオや、CM などのサンプル動画を視聴しながら、見る人に伝わるための視点や考え方などのレクチャーを行いました。今後は参加者を 2 チームに分け、企画、撮影、編集を進め、12 月には完成した映像の上映会を行う予定です。

講師の山城さんのレクチャーを受ける受講生

◆「第 5 回 “ ひめゆり ” を伝える映像コンテスト」作品募集中

ひめゆり平和研究所では「第 5 回 “ ひめゆり ” を伝える映像コンテスト」を開催中です。本コンテストでは、10 分以内の映像を募集しています。演劇、アニメーション、創作ダンスやラップなど、自由な表現、さまざまなアイデアを募集します。テーマは前回に引き続き「ひめゆりと○○（自由選択）」です。創作したい内容に合うテーマを添えてご応募ください。第 4 回では、「ひめゆりと食」や「ひめゆりとの出会い」など、ひめゆりや戦争を自分の身近な事柄に引き寄せた作品が寄せられました。締め切りは 2023 年 1 月 9 日（月・祝）必着です。たくさんのご応募お待ちしております。

詳しくはホームページをご確認ください。　https://himeyuri.or.jp/JP/top.html

◆学校団体用ワークシートを作成

当館では、このたび、学校団体用のワークシートを作成しました。

見学時にワークシートを使用する学校がありますが、穴埋め式の場合答え探しが優先になり、生徒が展示を見る時間がなくなる様子も見られました。実際に当館に足を運び、展示を見学するからこそできる学びや体験をしてほしいと、２つのシートを作成しました。①「ひめゆり平和祈念資料館　ワークシート」（展示見学用）と、②「ひめゆり平和祈念資料館×平和の礎　ワークシート」です。

①の設問はたった３つですが、展示をよく見ることを促し、展示から得た小さな気づきや学びを記録するものとなっています。このシートをもとに感想を語り合うことができます。②は、当館と平和の礎の２ヵ所を訪れる学校にお勧めの内容です。事前に亡くなったひめゆりの生徒ひとりについて調べ、当館では写真を、平和の礎では名前を探します。写真と名前を探すなかで、その生徒が実際に生きていたことを認識し、沖縄戦について想像し、考える時間を持つことが目的です。

２種類ともまだ試作の段階ですが、ご希望の学校には配布します。使用後ご意見を頂いた上で改良していく予定です。

※右の QR コードからお申し込みできます。ただし、入館予定がある学校団体に限ります。

相思樹

ひめゆり学徒の証言映像にふれて

説明員　宮城奈々

今年の８月に「ひめゆり証言映像上映会」を開催しました。１９８９年前後にＮＨＫ沖縄放送局が取材したひめゆり学徒の証言映像の一部を上映し、当館の古賀学芸員が解説を行いました。中には今回初めて公開するものもありました。

上映会に向けて、私は使用する映像の選定を手伝いました。戦争体験の証言以外にも資料館建設の様子や、戦跡めぐり、ご遺族のインタビューなど初めて見るものが多くありました。どの証言もとても大切なため、どこを見てもらえばいいか悩みました。

特に印象に残ったのは、北城良子さんの証言です。

同級生と当時隠れていた糸洲第二外科壕を訪れた北城さんが、涙を浮かべ言葉を詰まらせながら話す様子が印象的でした。馬乗り攻撃を受けた壕から脱出する時に、怪我をして動けない後輩が水をほしがっていた声が忘れられないこと、戦後足に後遺症が残り、同窓会の場に行くのも避けていたが、同級生に説得されて今回ようやく戦跡を訪れる決心をしたこと、時間にするとわずか数分ですが、戦後も長い間苦しみ、葛藤してきたことが伝わってきました。

この映像も今回の上映会で公開されました。参加者はとても熱心にご覧になっていました。中には持参した資料を広げている方もおり、関心が高いことが分かりました。

上映した映像はほんの一部です。他の映像もいつか別の形で公開し、より深く沖縄戦やひめゆり学徒の気持ちを知ってもらうことが出来たらいいなと思いました。

2022 年度博物館実習生レポート紹介

８月１日から８月５日までの日程で、琉球大学国際地域創造学部国際地域創造学科から博物館実習生１人を受け入れました。実習生の課題レポートをご紹介します。

「ひめゆり平和祈念資料館に提言したいこと」

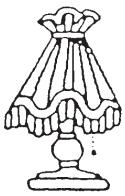
琉球大学 国際地域創造学部 国際地域創造学科 地域文化科学プログラム　4 年次　徳永早希

ひめゆり平和祈念資料館で５日間実習を体験して、提言したいことが３つあります。

１つ目は、他館や地域との連携の強化についてです。類似施設や現存する壕やガマを訪れてみて、資料館で学んだことを五感で感じることができ、それぞれの展示内容を活かした、深みのある学習をすることができました。現在はコロナで難しいかもしれませんが、平和学習を随所で行うことができるバスツアーなど、地域の公共交通などを活かした、地域一体となった取り組みが行われると良いなと思いました。実際に私が今回の実習で特に効果的だと感じたのは、ひめゆり平和祈念資料館で戦時中の食料の大きさや、学徒の仕事内容について書かれたキャプションを読んだ後、それを実際に再現したものを、南風原文化センターで見たことで、文章で理解するだけでなく、食料の実際の大きさや、患者の運ばれたベッドの大きさを目で見ることができ、ベッドに関しては、コロナ以前は、実際に入ることもできたということで、自分自身も当時の人々になりきって体験学習ができることは、より記憶に残りやすい学習法なのではないかと思いました。また､学徒隊が運んだ物資の重さを再現したものを持つこともでき、当時の過酷な状況について、より想像しやすくなりました。また、飯上げの道や、壕、ガマの中に入ることで、当時の人々の足跡の一部を辿ることができ、沖縄戦の歴史や当時の人々が見たであろう風景を直に見ることで、当時の状況について考察しやすくなりました。

２つ目に、資料館の存在のアピールや上記の連携のため、SNS を利用した宣伝や、詳細なガイドマップ、アクセスマップを作ることです。実習前、資料館のホームページを見て、沖縄戦や、平和学習に関連する施設のバナーを貼り付けることで、他館や関連施設への広告となり、沖縄の観光スポット以外にも焦点を当ててもらうことができるのではないかと思いました。また、他館や関連施設にもひめゆり平和祈念資料館のサイトへのリンクを貼ってもらうことで、糸満市だけでなく、沖縄全域を対象とした大きなつながりが生まれ､県にとっても良い経済効果をもたらすのではないかと思いました。さらに､マップを詳細に作ることで、ツアーに参加する形の学習法だけでなく、自分たちでプランを立てて主体的に学ぶという受け身にならない積極的な学習を行うことができるのではないかと思いました。

３つ目に､国外向けの発信を強化することです。英語の字幕がつけられている証言映像や､キャプション、多言語のパンフレットがあるのを見て、学徒隊の思いを世界中のさらに多くの人に共有してもらうことができるのではないかと思いました。近年、世界の平和が脅かされるような出来事が身近に感じられるようなことが増え、戦争を絶やすための取り組みはより一層重視されるような時代になったと感じています。生存者の生の声を語り継いでいる資料館の取り組みは、県内外だけでなく、国外にも必要なことで、他国の戦争にあった被害者とも思いを共有することで、戦争の無益さをより実感することができ、平和を望む声はより強くなっていくと思います。



本　棚

仲程　昌徳

一般社団法人 養秀同窓会『一中学徒からのメッセージ―遺書に託された恒久平和への道―』
（2022 年、一般社団法人 養秀同窓会）

一般社団法人養秀同窓会が、「遺書修復作業」に着手したのは 2016 年、終了したのが 2021 年、都合、6 年に渡る事業であった。それは、「劣化のかなり進んだ、朽ちた遺書・封筒・包み紙（包みの中には遺髪、爪）等を丁寧に展げ、シミ・黴・ダニの除去、ＰＨ調整など、専門職の精緻な技で出来得る限り原型を留めていくように慎重に時間をかけて丁寧に進められた」という。修復がいかに大変な作業であったかは、それに要した時間の長さが示しているが、それを可能にしたのは、他でもなく、遺書を残した学徒たちへの哀惜の念であり、二度とそのような生徒たちを出したくないという覚悟に発していたといえよう。

遺書は「1945 年（昭和 20 年）4 月 4 日頃、鉄血勤皇隊として学徒動員された県立一中の生徒たちに、県立一中の学校として、一人ひとり家族あて書かせたものである」という。そしてそれらの遺書は、職員によって、持ち運ばれたが、「戦況が厳しくなり、余儀なく 2 個の甕に」詰め、「地中（現、豊見城市保栄茂（びん））に埋め」てあったのを、「戦後 2 年目に地中から掘り出され、養秀同窓会で大切に保管、展示」されていたものである。

本書は、それらの遺書を、「戦死者（20 名）」、「生存者（8 名）」、「氏名不詳（11 名）」そして「靖国神社所蔵分（9 名）」に分け、収めてあるが、「戦死者 20 名」のうち文書が残っているのは 7 名、あとの 13 名は封筒のみ、以下生存者に関しては、封筒のみ 5 名、氏名不詳は封筒のみが 2 名、「靖国神社所蔵分」は、9 名とも文書があって、封筒だけ残っているものを含めて、都合、48 名分の遺書が収録されている。

掘り出された遺書は「様々なルートを介して本人や遺族に届けられた」一方で、「引き取り手の無い遺書等は養秀同窓会に寄託された」ということで、その寄託分が修復され紹介されているのである。

寄託された遺書類は「予想以上に劣化」がすすんでいた。それで、公表するにあたって判読するのがむつかしいのは「前後の文言から推察」し、「赤い文字」で埋め、まったく読めないのは「■■」にしていた。

次に紹介するのはその一通である。

遺書

父母様元気でおられますか／自分も元気でやっております／戦争もいよいよ熾烈化して／俺**等**いよいよ国**家**の一員と／して御奉公の時がきました／自分**も**立派な帝国の／干城となりて働きます。／彼の憎い米英を撃滅／する迄頑張り抜かねば／なりません。／祖国の為に、また陛下の為に／一死報国以って君恩に／むくいん／“決死敢闘悔いなし”／最後まで頑張ります／自分の事は心配なく／又家中元気でやって下さい／では又、母よさらば／祖国よいざさらば■／最後に父母の健康を祈る（／は改行箇所）

一中学徒の遺書は、そのほとんどが、上のような文面になっていたといっていい。そして多くの遺書がそのような文面になっていたのは、理由のないことではない。それは「学校で教えられた通りに『自分は国のため天皇陛下のために命を捧げます。決して嘆かないで下さい』という意味のことを書いた」といった証言があるように、「教えられた通りに」書いていたからである。もちろん「教えられた通りに」書いていくなかで、「皆元気でいて下さい。／先や一番命あり／命があって何事も／思っている通りに出来るのである」と書いたのもいた。「死」を当然のこととして書かれていた遺書のなかに「命」が一番だと書いたのもいたのである。

遺書の多くは、先に引いた遺書に見られるように、「祖国の為」「陛下の為」「一死報国」「決死敢闘」の文字で埋め尽くされていて、生きて帰ることがないことを前提にして書かれていたが、一般社団法人養秀同窓会は、何故今になってそのような生徒たちの「遺書」を公表しようと考えたのであろうか。

それは「編集後記」に記されているように、「戦争を知らない世代へ『戦争とは如何なるものか』や『平和の尊さ』をあらためて考えてみる『道しるべ』の手掛かりと」なるようにという願いからでたものであった。

「君国の為」に「醜敵撃滅」を誓い、出撃し、二度と郷里の土を踏むことのなかった学徒たちの行為を、英雄として奉りかねない現今、「遺書」の刊行は危ういともいえるが、そこから何を読み取るか、試金石となる一冊であろう。

（編集注：遺書中の「赤い文字」はゴシック体で表記）

仲宗根政善日記抄（65）

［1980 年］六月十八日（前号のつづき）
電話に出た生徒は真面目そうではあった。決して礼を失しているとも感じられなかった。しかし時間がないから電話でおうかがいしますといい、長くなりますから電話をきりますともいう。公衆電話からとも感じられなかった。本当に戦争のことを聞いてみようとの気持は全く感じられなかった。体験を聞いて考えてみようという意欲はない。

一体どうしたら、生徒たちに戦争とはどういうものか、平和とはどういうものかを知らせようとするその根底にあるものが何も感じられない。こんな教育がはやっているのであろうか。

戦跡を実践（ママ）に見て、いはまくらの歌碑を見て感じたという何ものもない。明日は討論会がある。その討論のための準備、ただいはまくらの歌の意味を聞いているにすぎないような気がした。

あるいは電話で、相手の顔も見えず、ただ声だけを聞いているので、お互いの意志の疎通のためかもしれない。教育はそんなかるがるしい方法で、効果をあげることが出来るのであろうか。

戦争を体験した者には、心底に伝えようにも伝えようもないものが沈殿しているためにあるいはいらだちがあるのかもしれない。戦争を知らない若い世代との大きなへだたりがあって、そのようなむなしさを感じるのかも知れない。伝えなければならない。しかし伝わらない。そのもどかしさ〔な〕のかもしれない。各高等学校へ直接でかけて、じっくり戦争の話をきかせてやらなければとも思った。

晩方紀子からの電話。夏休みに帰りたいとのこと。二十二日東芝劇場の映画、別れの曲、相思樹の歌が上映されることを伝えた。先日送った「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」はまだとどかないとのこと。正巳の友人の父親が南風原陸軍病院の第一外科の軍医であったことが最近になってわかり、去る京都出身の慰霊祭に家族づれで沖縄に行ったという。南風原陸軍病院第一外科の軍医で京都出身と聞いたので、大隈という姓かとききだすと、そうです。親しいお友達で京都に行くときは、いつも遊んで来るのですという。

京都に行くたびに、私は大隈軍医の遺族がきっとおられるにちがいないと気にかけていた。

南風原陸軍病院で、私と岸本幸安兄と二人は第一外科勤務を命ぜられた。病院丘陵の東南に九号八号七号の壕がヨ字型になって、東へ口が開いていた。連結の部分はさらに先へと堀りすすめる計画になっていたが、米軍が四月一日に嘉手納に上陸したために、作業は中止になり、連結の部分からわずかにほりひろげられてヨの形になっていた。9 号壕の奥の方が軍医室にあてられて、比嘉堅昌診療主任、福島慶之助軍医、山崎軍医、大隈軍医、児玉見習士官がいた。その後天願軍医、岡田見習士官などもくわわった。

大隈軍医はたしか京都で病院を経営しているという話を聞いた。几帳面な方で、きちんきちんけじめをつけなければ気のすまない方で、看護婦や生徒たちにもきびしかった。やはり都会人らしく、また礼儀の正しい方で京都という古からの都を感じさせるところがあった。

五月二十五日、南風原病院撤退のときにわかれ、摩文仁伊原の野中にあった石室であったのが、最後であった。この石室は何の目的で築かれていたか、今でもよくわからない。附近の畑から握りとったような石灰岩の大石を積みかさ

ねて、その上に坑木を渡し、簡単なおお〔い〕をして、その中に、第一外科の軍医たちが全員いた。中に自在鍵(ママ)をつるして鍋をかけてあり、炭火が燃えていた。戦争の真中とは思えずまるで茶人たちが茶をたのしんでいるようであった。私がはいってゆくと、毛布をかけて休まれていた福島軍医は身をおこして、生徒たちはどうだったかとあたたかいことばをかけられた。南風原病院を撤退してから摩文仁に来るまでのあらましの経過を軍医たちに報告した。その中に大隈軍医もいた。あれからは私たちは、波平の壕にいたためにその後は顔を合わせる機会はなかった。

六月十八日の晩、陸軍病院から職員生徒は解散を命ぜられた。伊原第一外科壕の奥、重傷の生徒のうめいているところで、私は最後の解散命令を生徒に伝えなければならなかった。壕の外は砲弾がさくれつしつづけていた。壕にとどまる方がよいのか。弾雨をくぐって死地に生路を見出すことがよいのか、判断にまよった。しかし、全員が壕にとどまることは玉砕につながる。壕の入り口の雑沓はまるで地獄の死人のむれのようであった。やがて、一人また二人と意を決して弾雨の中に出て行った。壕の中に生徒も残り少なくなった時、照屋、大城両兄と三名も壕を出た。照明弾はひっきりなしにあがった。伊原部落の道路上で、ついに三名を負傷して、壕にひっかえした。私は畏友比嘉診療主任にみてもらった。彼は傷はあさいよ。心配するなと私をはげましてくれた。そのそばに福島軍医と山崎軍医がいた。おそらく大隈軍医もそばにいあわせていたと察せられるが、はっきり記憶にはない。比嘉、福島、山崎君は、その後壕を脱出して山城方面へむかった。二十日比嘉軍医は山城の丘陵で、上原きみ子婦長とともに最期をとげた。福島、山崎軍医は海岸の方を彷徨していたと伝えられる。大隈軍医も多分山城を越して、喜屋武方面にすすんで行ったにちがいないが、その最後をみとどけた者はいない。

もう三十五年もたった。遺族たちに当時の模様をお伝えしたところで、何の役にも立つまい。しかし、遺族〔に〕とっては、いささかのことでも最期の模様を聞きたいにちがいない。大隈軍医のことを知っているのは、そう多くは生き残っていないであろう。たまたまその息子が、正巳の親友とは、また不思議な因縁である。今更お伝えしても何の甲斐もないこととは思いながらも、お伝えしたい。京都に行ったときもいつも、どこかに遺族がいそうだという気がしたのである。

三十五年にはじめてめぐり会うのも奇縁である。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
※〔 〕は編集で補った。
※旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

ひめゆり平和祈念資料館　ご利用案内

◆ 開館時間、料金、アクセス

1．入館受付：午前9時～午後5時（閉館は午後5時 25 分）　**2．休館日**：年中無休

3．入 館 料：①大人 450 円　②高校生 250 円　③小・中学生 150 円

団体（20 名様以上一括払）①大人 400 円　②高校生 200 円　③小・中学生 110 円

※ 2021 年 4 月 12 日より、入館料が改定されました。

4．交通案内

【路線バス】旭橋・那覇バスターミナルから［89 糸満線］で約 30 分、糸満バスターミナルで［82 玉泉洞糸満線］に乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・路線バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で［89 糸満線］に乗車し約 20 分、糸満バスターミナルで［82 玉泉洞糸満線］に 乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分

◆ 団体のご見学について

新型コロナウイルス感染症対策のため、当面の間、**見学は予約制となります。必ず事前にご予約ください。**

◆多目的ホールご利用のご案内

ひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約 40 分）、ビデオ視聴（証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」約 25 分、アニメ「ひめゆり」30 分）を事前予約制で承っております。ご予約は、資料館ご見学の団体に限ります。ご予約時間は下記受付時間内で調整いたします。お電話にてホールの空き状況を確認後、ＦＡＸかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話 or ビデオ受付時間】9:05 ～ 16:00（最終 16:00 開始）

※年末年始（12 月 30 日、31 日、1月1日～3日）･旧盆（旧暦7月 13 日～ 15 日）･慰霊の日前後（6月 21 日、22 日、24 日）は、講話の予約はできません。ビデオ視聴のみ受付可能です。

※慰霊の日（6 月 23 日）は、講話・ビデオともに予約はできません。

※ホールの収容人員は約 200 人（席）です。

※多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

※予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

※現在、新型コロナウイルス感染症対策をとりながら開館しております。多目的ホールのご利用方法につきましても、感染症の拡大状況に応じて変更がある場合がございます。詳しくは、直接お電話にてお問い合わせください。

◆オンライン平和学習のご案内

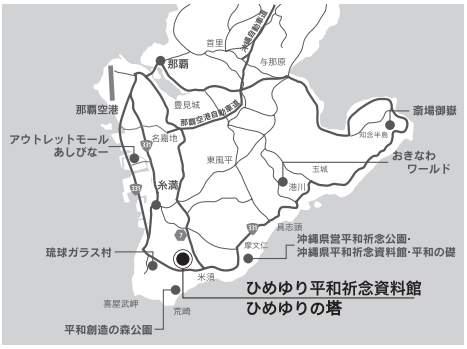
コロナ禍で沖縄へ足を運べない学校団体や修学旅行の事前学習として、オンライン平和学習の予約を承っております。
詳しくは資料館までお問い合わせください。

【オンライン平和学習メニュー】

所要時間：50 ～ 60 分　　人数：20 人以上

①ひめゆりの沖縄戦（平和講話）　料金：1回　15,000 円（税込）

②絵で見るひめゆりの証言　料金：1回　15,000 円（税込）

③オンライン展示ガイドツアー　料金：1人　小中学生 310 円　高校生 400 円　大人 600 円（税込）

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第 70 号
2022（令和 4）年 11 月 30 日発行
編集・発行：公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立
ひめゆり平和祈念資料館
〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1
☎ 098-997-2100　fax098-997-2102
H　　P：http://www.himeyuri.or.jp/
Facebook：https://ja-jp.facebook.com/HIMEYUIRI.PEACE.MUSEUM/